

# 小川未明作品考

——小学校国語教材としての今日的意義——

長田真紀

## I. 「死についての教育 (death education)」

「死についての教育 (death education)」を学校教育のなかへ取り入れる必要性があることを、日野原重明氏<sup>(1)</sup>やアルフォンス・デーケン氏<sup>(2)</sup>らはつとに述べている。子どもにとって死をタブーにしてはならない、子ども時代から死を考え続けていくことが、生を実りある豊かなものにしていくことになるからである。

アルフォンス・デーケン氏によると、西ドイツ（当時）では、小学校の一年から高校の最終学年（日本より一年長い）まで国公立の学校であっても宗教の授業が毎週行われ、子どもの家庭の信仰によって、カトリックとプロテスタントに分かれて実施されているという。そしてその宗教の授業のなかで、「死についての教育 (death education)」が実施されている。それは、宗教の立場にとどまらず、哲学、医学、心理学、文学などさまざまな角度から、学際的に考えさせる教育であるという。また、アメリカでは、多くの州の小学校から高校までのあいだに、保健体育や文学、社会科などいろいろな授業のなかで「死についての教育 (death education)」がなされているという。<sup>(3)</sup>

小川未明（明治五年～昭和三十六年）は、子どもの病、障害、死、遺された者の悲嘆などを恐れることなく児童文学として描いていった作家である。

本稿では、小川未明の作品を、「死についての教育 (death education)」という視点から、小学校の国語の教材として扱うことの今日的な意義について考察してみたい。

## II. 子どもの病と死

「金の輪」（大正八年二月二十一日、二十二日「読売新聞」）は、散文でありながら、まるで詩のような味わいをもち、未明の全作品のなかでも、非常に完成度の高い傑作である。

長い間病気で臥せっていた太郎は、まだ春浅い三月の末、漸く床を離れることがで

きた。往来に出てみたものの、他の子どもたちは遠くへ遊びに行っているらしく、誰の姿も見えない。しょんぼりと太郎が細い道を歩いていると、鈴を鳴らすように、金の輪の触れあう音が聞こえてくる。それは、ひとりの少年がふたつの金の輪をよい音色を響かせながら回して走っているのであった。太郎には見覚えのない少年であったが、少年の方は太郎に向かって友達のように微笑んで去って行ったのである。

翌日の同じ時刻、太郎は再び金の輪を回して走ってくる少年を見る。少年はいっそう親しげに微笑み、走り去って行った。太郎は、いままで一度も見たことのないその少年が、自分にとって一番親しい友達のような気がして、明日こそ話しかけて友達になろうと思いながら、家に入ったのであった。

その夜、太郎は少年と友達になり金の輪をひとつ分けてもらい、一緒に赤い夕焼け空の中に走って行く夢を見た。

明くる日、太郎は再び熱が出て、二、三日めに七つで亡くなってしまったのであった。

未明は、病と闘う子どもの姿を描いたのでも、病気の友達を励ます子どもを描いたのでもない。逆に漸く床を離れることのできた太郎は、数日後にはあっというまに死の世界へと連れ去られてしまう。あまりにも無力である。

しかしこの作品の唯一の救いは、一緒に遊ぶ友達もいないまま結局のところ数日後にたった七歳で死んでいく太郎が少年に出会ったこと、そして少年と金の輪を回す望みが夢の中で叶えられたことである。

太郎の心の分身であるかのような少年が、白昼夢の幻であったのか、現<sup>うつ</sup>のものであったかは問題ではなく、太郎にとって真実であったということだけが確かなことである。

長らく病気で床に就いていた太郎には、漸く外へ出られるようになって、一緒に遊ぶ友達はいない。このひとりぼっちの太郎にとって、微笑みながら金の輪を回して走って行く少年と出会えたことは、この上もない喜びであったのである。

この作品を読む子どもたちが、少年を実在の子どもだと考えても、あるいは、あくまでも太郎が見た夢だと考えても、どちらでも差し支えないだろう。

また、読者の子どもたちの多くは、太郎の立場ではなく、「遠くの方まで遊びにいった」「みんな」の立場であろう。しかし、自分たちが元気いっぱい外で遊びまわっている間にも、病気でそれが不可能な子どもが存在していることを認識することになる。当然備わっていると思っている健康を、享受できないひとの立場に思いを馳せる

ことにもなるだろう。

これまで病気や怪我で学校を休んだ時に、家でどうしていたか、どんなことを考えたか、振り返らせてみることもできよう。

そして、死とはなにか、死が避けられない絶対性のものであるならば、生をどう生きたらよいかなど、一人ひとりの子どもが、死を自分のものとして考えてみる貴重な機会になる。特定の死生観を押し付ける必要はなく、死について考えることを避けないということが重要である。

### Ⅲ. 遺された者の悲嘆

「金の輪」は子どもの病と死に焦点があてられた作品であるが、「月とあざらし」(大正十五年四月『兄弟の山鳩』アテネ書院)は、子どもを失った親そのものの姿が描かれている。

銀色に凍った北の海の氷山の頂きに、一匹のあざらしがうずくまり、毎日周辺を見回していた。このあざらしの子どもは、秋のはじめにどこかへ消えてしまったのである。子どもを失ったあざらしは、何を見ても悲しくて心が張り裂けんばかりであった。吹きすさぶ風にも、「どこかで、私のかわいい子供の姿をお見になりませんでしたか」と尋ねずにはいられなかった。風は、「しかし、あざらしさん、秋ごろ、猟船が、このあたりまで見えましたから、そのとき、人間に捕られたなら、もはや帰りっこはありませんよ。もし、こんど、私がよく探してきて見つからなかったら、あきらめなさい」と言って、吹き去って行ってしまった。あざらしは、毎日、風の便りを待つが、その約束をした風は戻ってはこなかった。後からきた仲間の風にも尋ねてみるが、言伝てをするからと言って、やはり去っていった。

毎日、毎夜、ひたすら子どものことを思って悲しみにくれるあざらしを、心からかわいそうに思った月は、やさしく照らしながら、「さびしいか？」と声をかけるのであった。そのたびにあざらしは、「さびしくて、しかたがない!」「さびしい! まだ、私の子供はわかりません」と、月に訴えるのであった。「私は、世の中のどんなところも、見ないところはない。遠い国のおもしろい話をしてきかせようか？」と月が言っても、あざらしは、「どうか、私の子供が、どこにいるか、教えてください。見つけたら知らしてくれるとって約束をした風は、まだなんともいって来てはくれません。世界じゅうのことがわかるなら、ほかのことはききたくありませんが、私の子供は、

いまどこにどうしているか教えてください」と頼むのであった。「この北海の上ばかりでも、幾ひきの子供をなくしたあざらしがいるかしれない。しかし、おまえは、子供にやさしいから一倍悲しんでいるのだ。そして、私は、それだから、おまえをかわいそうに思っている。そのうちに、おまえを楽しませるものを持ってこよう……」そう言って月は、雲の後ろへ隠れた。

それ以来、月はその約束を決して忘れたことはなかった。ある晩、南方の野原を照らしていると、牧人の男女が、咲き乱れた花のなかで笛を吹き、踊り、太鼓を鳴らしていた。宴が終わった後、草原にひとつの小さな太鼓が投げ出されてあるのを、月は気づく。それをそっと拾いあげた月は、背中にしょって北へと旅するのである。

北の海では、相変わらず凍てついた氷山の上であざらしが子を思いうずくまっていた。月は、「さあ、約束のものを持ってきた」といって、太鼓を渡してやった。あざらしは、その太鼓が気にいったらしく、後日、月がこの近くの海上を照らしにきた時には、氷も解けはじめたなかで、あざらしの鳴らす太鼓の音が波間から聞こえてくるのであった。

この「月とあざらし」は、子どもを失った親あざらしの深い悲嘆と、あざらしが、子どもが戻らないという耐え難い現実を深くみつめ、向き合いながら、漸くそれを受容していくプロセスを見事に描き切った傑作である。

最初にあざらしに問いかけられた風は、子どもはおそらく人間に捕まっただろうからもはや帰ることはないだろう、あきらめろ、と答える。つまり、あざらしに客観的事実を伝える存在である。そして、それは風の特長とともに一回性のものである。

一方あざらしは、それで思い切ることはできない。繰り返し繰り返し子どものことを考え続け、膨大な時間を悲嘆に苦しみながら氷山の頂きにうずくまり過ごすのである。

その独りぼっちで痛みにたえるあざらしに寄り添うのが、月の存在である。「さびしいか?」「さびしくて、しかたがない!」「さびしいか?」「さびしい! まだ私の子供はわかりません」必死に子どもを求め、さびしさを訴えるあざらしの心からの叫びを、月は静かに受けとめる。子どもを見つけ出すこと、つまり現実的な解決が不可能であることを、月は十分承知している。できることは、ただひたすら、心をこめてあざらしのかなしみを分かち合うことだけなのである。

月は南の野原で拾って来た太鼓をあざらしに渡してやるが、その後、あざらしの打

つ太鼓の響きが、海の波間からずっと聞こえてくる。この描写は、一読して胸に深く刻まれる。

あざらしは、黙々と太鼓を打つことで、子どもを失ったことを受け入れ、絶望を越えていく。荒涼とした氷山の「氷が解けはじめ」たのと同じくして、あざらしの凍てついたかなしみのところは、わずかに、ひそやかに、解けていくのである。

月と太鼓は、あざらしと共にいる、共にある、ものとして、そのかなしみを支える存在である。

現代社会の核家族化や、日本人の世界一を誇る平均寿命の長さ、乳幼児の死亡率の低下などにともない、子どもたちがその幼少年時代に家族の死を経験することはきわめて少なくなったといわれる。しかし家族を、病で、事故で、災害で、自殺で、亡くす子どもは意外に多い。筆者の小学生時代を顧みても、三十数名のクラスメートのうち、三、四名の友人が、つまり一割ほどの子どもが、父母のどちらかを病や事故で亡くしていた。他のクラスや学年も同様であった。重篤な病を患っている家族を持つ友人も、子どもの耳に入ってきたかぎりにおいても一、二名いた。

子ども時代に経験する家族の死の数が少ない今日だからこそ、そのひとつの経験が子どもの心身に想像をこえる衝撃を与えらるゝといえよう。

未明が描いた「月とあざらし」は、我が子を失くしたあざらしが、くる日もくる日も子どもを探し続け、待ち続ける。吹き去っていく風に子の行方を尋ね、月にさびしさを訴える。愛する存在を失くしたものは、深い苦悩とかなしみのなかでどれだけ長い時間をさまようことか。しかし、遺された者は、時間はかかっても、愛する者の死を静かに受けとめ、それを乗り越えていくことができることを、あざらしの姿を通して子どもたちは考えていくだろう。まして、家族の死を経験した子どもは、自分の苦悩やかなしみは当然のことであり、また、こうした思いを背負わされているのは決して自分ばかりではないとわかり、安心してころを新たな希望へと向けることができるだろう。そして、それは知らず知らずに、その子どものころの成長へと繋がっていく。

さて、この作品のタイトルが「あざらし」ではなく「月とあざらし」であることに注目したい。未明は、子どもを失くして悲嘆にくれるあざらしだけを描いたのではない。そのあざらしを見守り、話を聴き、少しでも慰めになればと太鼓を持ってきてやる月の存在も丁寧に描いている。つまり、遺された者を見守る存在である。月があざ

らしに寄り添うことで、わずかずつではあるが徐々にあざらしは深いかなしみからころを開いていくことになる。月が照らす光明が果たした意味は大きい。

現実的、直接的な解決が不可能であったり、困難であったりする場合、周囲は遺された者とどう配慮して接していくか、自分の立場で何ができるか、子どもたちは月の役割を読解しながらそれを考えていくことになる。

かつて、自殺というのは青春を彷徨する青年にとっての切実な問題であり、東西の文学作品のなかでもしばしば描かれてきた。ところが今日では、ストレス社会における経済的な問題にからんだ中高年の自殺、孤独な高齢者の自殺、いじめが原因の第一とされる学齢期の子どもの自殺、といったように各々の世代において自殺者は急増している。とりわけ、小学生の自殺は低年齢化の傾向が顕著であり、本来一番自殺には遠い存在であるはずの子どもの死は痛ましいことこの上ない。子どもの自殺の予防については、さまざまな面から対策を考えなければならないのはいうまでもないが、子ども自身が自暴自棄になって自分の命だから自殺したってかまわない、と考えてしまうことは憂えるべきことである。

「月とあざらし」のあざらしのように、子どもを亡くした親はどんなに深いかなしみと苦悩に陥るか、本人以上にその命を、存在を、大切にいとおしく思っている者が周りにはたくさんいることを伝えて気づかせなくてはならない。その意味においても「月とあざらし」は恰好の教材である。

#### IV. 生きる希望へ

阪本一郎氏は、子どもの読書興味の発達を、次の八段階にとらえた。<sup>(4)</sup>

- |             |              |              |
|-------------|--------------|--------------|
| ①子守話期（2～4歳） | ②昔話期（4～6歳）   | ③寓話期（6～8歳）   |
| ④童話期（8～10歳） | ⑤物語期（10～12歳） | ⑥伝記期（12～14歳） |
| ⑦文学期（14歳～）  | ⑧思索期（17歳～）   |              |

そのうち、④童話期（8～10歳）について阪本氏は、「自己中心的な心性から脱して、自他の区別がわかりだすために、成人への全面的依存を離れ、自主的な態度に移っていくとき」であり、この段階では、「現実の子どもの個人生活に取材して、それを想像で色づけたもの」が好まれるとし、小川未明をあげている。<sup>(5)</sup>

小学校中学年くらいになると、命ある存在は必ず死を迎えねばならないこと、死んでしまったらもう二度とこの世には存在しなくなってしまうということ、その死は、

自分にも家族や友人にも必ず実際に訪れるということ、つまり死の絶対性と普遍性をほぼ確認できるようになる。この時期にこそ、自己の死や他者の死について考えてみることは、非常に大切である。

小川未明の作品は、登場人物や場面設定がシンプルな構想であるなかに、人間の生と死がもつ極めて本質的な問題が潜められている。加えて詩的な情感豊かな文章であり、繰り返し読むことで子どもたちは、このばの息吹きを感じとりながら、自己の年齢や経験に応じた思考を深めていくことができる。

未明の作品には病や死が濃厚に描かれていることで、子どもたちに読ませることを否定的にとらえる向きも依然としてある。しかし、病や死を意識することで、限りある生を豊かにできることを考えると、恐れることなく、「死についての教育（death education）」の文学教材として未明の作品を再考していく意義があるのではなかろうか。

子どもたちの実人生には多くの困難や苦悩、痛み、そして深いかなしみが待ち受けている（場合によったら死よりもつらいものさえも）。しかしそれを受けとめ、乗り越えていく力も成長とともに培われるはずである。未明の作品がそうであるように、人生には必ずや希望の光がさすことを、多様な教材を用いて、広い視野で考えさせることが必要である。

## 注

- (1) 日野原重明『命をみつめて』（一九九一年二月 岩波書店）
- (2) アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』（一九九六年十一月 日本放送出版協会）
- (3) 前掲（2）に同じ。
- (4) 阪本一郎ほか『新読書指導辞典』（昭和五十六年七月 第一法規出版）
- (5) 前掲（4）に同じ。

※小川未明については、「小川未明論——母と子の問題を中心に——」（『語る』一九九九年八月 上田女子短期大学）、「小川未明論——我が子を亡くした親のかなしみ——」（『文化の諸相』二〇〇六年七月 上田女子短期大学）でも論じた。あわせて参照されたい。